

伝統のまつり 次の主役はあたしたち

伝統文化こども教室 「さづかわ祭り教室」



令和5年最初の教室で衣装を着た子どもたち

伝統文化こども教室「さづかわ祭り教室」は、幸津川町に伝わる「すし切り祭り」の祭礼を学び、受け継いでいこうとする子どもたちのための教室です。

祭礼で次世代の主役になる子どもたちは長刀踊りの復活を目指して猛練習中。地域ぐるみでサポートしています。

祭りは「コミュニティ」の中心 子ども「好き」が継承の鍵

幸津川町の下新川神社では、毎年5月5日に住民たちの手で脈々と受け継がれてきた「すし切り祭り」が営まれています。拝殿前で神姿の若衆が鮎（あし）を切り分ける「すし切り神事」が有名です。祭り全体では、宮中の太鼓渡し、神輿（みこし）渡御、かんの舞、長刀振りと多くの神事や行事があり、その一つ一つが地元で大切にされています。

祭りの成功体験は 郷土愛と自信を育てる

幸津川伝統文化保存会（伊藤五作会長）によれば、町の人口は267世帯763人（令和4年11月末現在）で、600年以上続く祭礼を住民の手で脈々と受け継いできましたが、高齢化やライフスタイルの変化、子どもの数も減って、祭礼の伝統を守り続けられるかどうかの不安も大きいといわれています。

そんな中で3年前に始まった教室では、もっかのところ、長刀踊りの復活をめざした練習をしたり、祭礼を記録したDVDを観賞して地域の祭礼に親しんだりしています。

長刀踊りは「近江ケンケト祭り長刀振り」の一つとして、国重要無形民俗文化財にもなっている祭礼の花形ですが、約50年前

からは衣装を着けて参加するだけで、踊らなくなってしまったそうです。自分から「祭りに出たい」という子どもが減ってしまったのが最大の原因。両親や大人がお願いして参加してもらったのでは踊りの練習などできませんし、子どもが減ってベビーカーの赤ちゃんも長刀振りの役にならなくなりました。

森田さんは「子どものころは、まだ地域の子どもの多くが花形の大役は長男がする」という不文律もある時代でした。私は次男なので兄をうらやましく見ているんです。だから祭礼そのものへの執着というより、地域の歴史や伝統をこれからも大事にしたいという気持ちが強いです。それと同時に、祭礼に参加して大勢の前で長刀踊りを披露する経験は、子どもたちに地域への愛と大きな自信を育ててくれると思います」と話していました。

地域ぐるみでサポート 長刀踊りの復活へ

同じケンケト祭り長刀振りを継承する小津神社の「長刀まつり」を習いに行ったり、映像を借りたりして学び、教室で教えています。子どもたちは長刀を回

のが、伝統文化こども教室「さづかわ祭り教室」です。

祭りは地域住民が子どもからお年寄りまで参加して、伝統を受け継ぎ、つくり、楽しむのが大きな特徴で、地域コミュニティの中心になってきた歴史があります。「子どもたちは地域の宝物。子どもたちが祭りを好きにならないと伝統も続かない」と考えて、保存会事務局の森田雄さんを中心に立ち上げました。

教室では、もっかのところ、長刀踊りの復活をめざした練習をしたり、祭礼を記録したDVDを観賞して地域の祭礼に親しんだりしています。

長刀踊りは「近江ケンケト祭り長刀振り」の一つとして、国重要無形民俗文化財にもなっている祭礼の花形ですが、約50年前